

# 設楽発掘通信

No.40  
平成 30 年  
9 月号

## 石原遺跡の地元説明会を開催します

川向地区の石原遺跡では、今年度の五月から発掘調査を続けてまいりました。今回の発掘調査区では、地名の「石原」を思わせる土石流の痕跡が広範囲に確認されました。一方その影響を受けていない地点からは縄文時代中期から後期（約五千年前～三千年前）の土器や石器が出土しています。

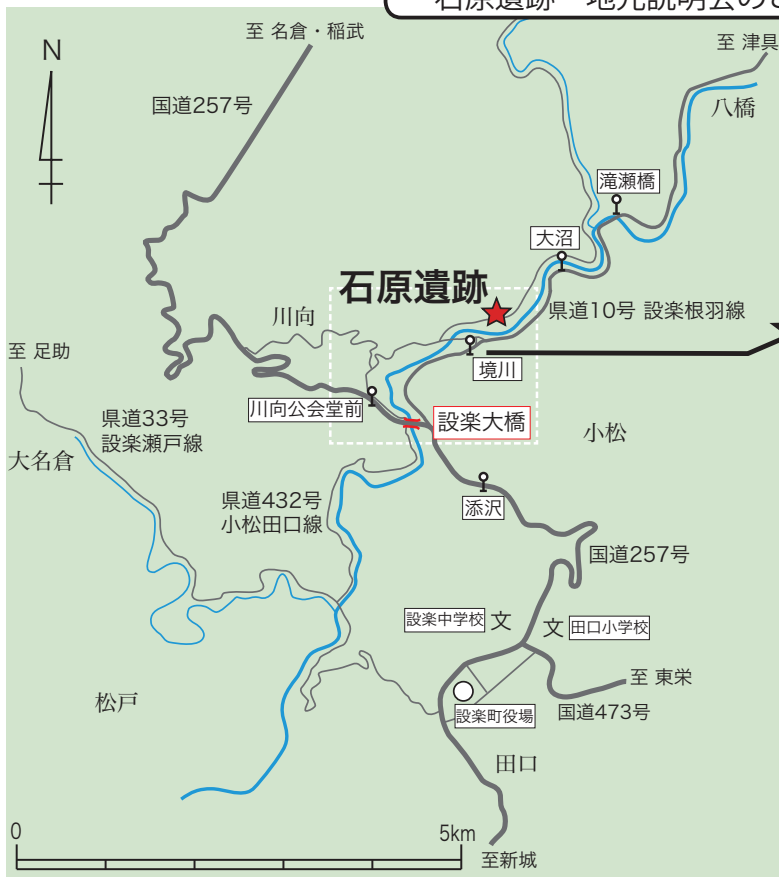
つきましては、十月二十七日（土）午前十一時より、地元説明会を開催します。詳細は下記のとおりです。最新の発掘調査の成果にふれることのできる機会です。みなさまのご来場をお待ちしております。

（愛知県埋蔵文化財センター 永井邦仁）



石原遺跡全景（18A区調査時、東から）

### 石原遺跡 地元説明会のご案内



10月27日（土）午前11時より開始。  
場所：遺跡現地（設楽町川向字石原地内。豊鉄バス津具線「境川」バス停から徒歩15分）  
参加費無料。内容：遺構の見学と遺物の展示。  
車でご来場の際は国道257号の①、県道10号設楽根羽線の②③から県道432号小松田口線に入り、境川橋西側で町道に進入してください。  
お問い合わせは、愛知県埋蔵文化財センター調査課・永井邦仁携帯 (080-1571-4990) またはホームページ (<http://www.maibun.com>) をご覧下さい。

### 石原遺跡の調査

石原遺跡では、調査区の西半分にあたる十八B区の調査が始まっています。現在は、重機による表土掘削が済んだ箇所から、順次人力による遺構検出作業を進めている最中です。果たしてこれからどんな遺構が見つかるでしょうか。

写真1は、重機掘削直後の様子で、土を平らに削りながら、遺構検出に向けて掘り下げを行っている様子です。発掘調査では、土の微妙な違いを見極めながら遺構を探します。そのために地面を平らに削ることで、その際に出た土の力（発掘現場では「浮いた土」と呼びます）を残さないことが重要となります。そうすることで、土の色や質を見定め、区別して、遺構が探しやすくなるのです。ところが、地面には大小多くの石や木の根など、様々な障害物が埋まっています。それらを処理しながら遺構検出を行うのはとても難しく、根気のいる作業です。「それが発掘作業だよ」、「そこをきれいに仕上げるのが腕の見せ所だよ」などと声をかけながら、発掘作業員さんへの要求は高まるばかりですが、作業員さんたちもそれに応えてくれています。



写真1 18B区掘り下げ作業風景（北から）



写真2 18A区拡張部遺構完掘（北東から）



写真3 18A区030SK遺物出土状況（南から）



写真4 18A区044SK縄文土器出土状況（南東から）

写真2は、十八A区で見つかった遺構を掘り終えた場面です。このエリアは、近現代の耕作や度重なる土石流による攪乱をまぬがれて、遺物包含層が残っていた場所です。ここでは二十を超える土坑と多くの遺物が見つかっています。それらの遺構がどのような性格のものなのかについては今後の検討課題になりますが、その中で特徴的な例を紹介いたします。

○三〇SKからは石器を作成する際に生じる剥片が大量に出土しました（写真3）。そのほとんどが安山岩と呼ばれる石材で、よく石器に使われるものです。この石原遺跡近辺で見られる石は、ほとんどが片麻岩と呼ばれるもので、安山岩は多く拾えるものではありません。その安山岩の剥片がまとまって大量に出土したということは、他所から持ってきて、この場所で石器を作っていた可能性があり、今後の調査で住居跡、集落跡が見つかるかもしれません。

○四四SKからは縄文土器片がまとまって出土しました。写真4に載せた破片には文様がはっきりと刻まれています。沈線による楕円や曲線状の区画とその中を斜線や刺突で充填する文様は、縄文時代中期末（約四千年前）のものではないかと推測しています。すると、今後見つかるかもしれない住居跡は、その時期のものではないかと、いろいろな期待が大きくなって膨らんできました。

（安西工業株式会社 鷺坂有吾）

### 滝瀬遺跡の調査

現在、滝瀬遺跡では、十八C区の遺構検出や遺構掘削を進めながら、十八B区西側を重機によって表土掘削を行っています（写真5）。

十八C区では、調査区の南東側から、溝状遺構が見つかりました（写真6）。溝は、ほぼ境川に並行し、川側にだけ石が組まれています。北側は調査区の外に向かって折れ曲がっている可能性があります。溝からは、灰釉陶器や、山茶碗が見つかっていますので、中世以降の溝かもしれません。また、調査区の北西端から、平成二十八年度の調査で見つかった伊那街道の続き部分が見つかりました（写真10）。道路部分は、深さ約三cmの溝状になっており、そこに砂利が敷き詰められ、硬く締まっています。

それらの遺構の下には、広い範囲にわたって縄文時代の遺物包含層が確認されています。そこから、縄文土器片や石鏃（矢じり）、石匙（匙形の刃物）（写真7）、有溝石錘（網などに付ける錘）（写真8）、打製石斧（土掘り具）、磨石（木の实などを磨りつぶす道具）、剥片などが見つかっています。現在見つかった縄文土器は、後期前葉から中葉（今から約四千年前～三千五百年前頃）

が主体です。石鏃は、茎（矢柄を装着する部分）のある有茎石鏃（写真9）と、茎のない無茎石鏃が見つかっています。遺物包含層には、遺物などがまとまっている部分があり（写真11）、遺構の可能性があるかどうかを検討しながら、調査を進めています。

十八B区は、傾斜が急な部分もあるため、慎重に作業を行っています。調査区の中央付近では、遺構が残っている可能性があるとみられます。

（安西工業株式会社 高木祐志）



写真5 18B区表土掘削（南東から）



写真6 18C区溝状遺構（西から）



写真10 18C区伊那街道（西から）



写真11 18C区遺物検出風景（南東から）



写真7 18C区石匙



写真8 18C区有溝石錘

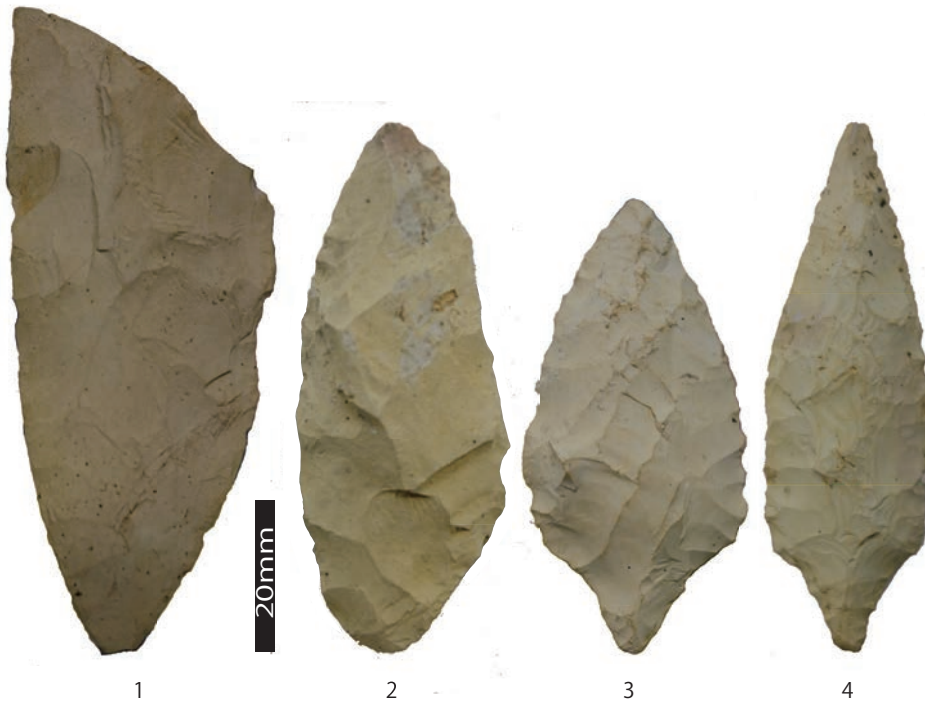


写真9 18C区石鏃

# 石器から時代を推察する

遺跡から出土する土器や石器たち。これらの遺物はいろいろなことを語ってくれます。石器は、土器のように理化学的な方法から年代を調べることができませんが、器種や形状からおおよその時期が特定できる場合があります。では、どのようにしてわかるのか。設楽町内の縄文時代の遺跡を対象に具体的に見ていきたいと思います（写真12・13）。

縄文時代の石器のなかでも、狩猟具は変化が顕著で時期が特定しやすいこと



1・2：木葉形尖頭器、3・4：有舌尖頭器（原寸大）

写真12 川向東貝津遺跡出土の石器

で知られています。縄文時代の狩猟具には木葉形尖頭器（1・2）、有舌尖頭器（3・4）、石鏃（5・6）があります。このうち木葉形尖頭器と有舌尖頭器は、縄文時代草創期前半（約一万六千～一万三千年前）に限られます。一方石鏃は、縄文時代の全ての時期に存在します。縄文時代後期（約四千年前）以前のもものは、鹿の角などの押圧具を用いた整形加工を器体の中央まで施すものが一般的ですが、縄文時代後期以降はその整形加工を周辺にのみ施すものが多くなります。なかでも、側縁を鋸歯状に仕上げるもの（5）は後期（約四千～三千年前）に特徴づけられます。

このように石器ひとつからでもひじょうに多くのことがわかります。みなさまも、博物館に展示してある遺物をよく観察してみてください。石器が当時の人々の暮らしぶりを語りかけてくれるかもしれません。

（愛知県埋蔵文化財センター 田中良）



5・6：石鏃（原寸大）

写真13 石原遺跡出土の石器

## 設楽発掘通信

No.40 平成30年9月号

編集・発行

公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団

愛知県埋蔵文化財センター

〒498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町野方802の24

電話 (0567)67-4161【管理課】 4163【調査課】

ホームページ <http://www.maibun.com>

Facebook <https://www.facebook.com/maibunaichi>

Twitter [https://twitter.com/aichi\\_maibun](https://twitter.com/aichi_maibun)

印刷・協力

安西工業株式会社